

# ひとを育てる活動

JOFPA 基金奨学金 1 期生は 2 名、ムスリムの学生です



右から、ナブサさん、看護学生、ジョハラ、モナリサ、モナリサの母親ベンさん。  
(PIHS 事務所で)

前号でお伝えの JOFPA 基金奨学金の受給者が決まり、その指導、監督をお願いしている PIHS のナブサさんと、覚書を交換するため、6 月 13 日 PIHS 事務所を訪ねました。

保護者同伴と聞いていましたが、ジョハラの母親は、遠く離れたパリンバンで、HANDS 支援の耕運機貸出事業も担当する保健ボランティアとして大変多忙で、欠席。モナリサの母親ベンさんも、私たちが初めて PIHS と協働した 2002 年の事業以来、ずっと活躍しているティナガカン村の保健ボランティアの一人です。

覚書では、卒業後 3 年間は、PIHS の看護師として、ムスリムの村で働くこと、万一、別に職を求めた場合は、受領した奨学金の 10% を 2 年以内に返還するということになっていますが、二人ともハイスクール時代から、母親の地域医療の活動を手伝っていましたから、4 年後には、プロとして村に戻ることに迷いはないようです。オリエンテーションではとても緊張したといいながら、学べることの喜びと感謝を伝えてほしいと、終始笑顔の二人でした。

奨学金は月額 4000 ペソ (約 1 万円) です。実習経費がかかるため、下宿代など生活費は賄えません。ナブサさんも、PIHS 事務所を宿として提供し、父母の負担を少しでも減らしたいと考えています。

CMIP カレッジ奨学生の近況

— 地元の教会信徒も初めてスポンサーに —

「ピン・モレロはカルンパン」「ナイッサは JPIC (正義と平和委員会)」6 月の訪問時、ノビシエート寮の夕食のあと、JAUW (大学女性協会) 東京支部の奨学生となって 4 年目、今年は教育実習というカルメラが、HANDS 支援以外の新入生を紹介してくれました。ピンはハイスクールの時 HANDS 会員の奨学生でしたが、今年、私たちが提示した新規カレッジ生枠の 3 名に入れなかったようです。

カルンパンとは、ジェネラルサントス市内にある教会で、主任司祭は前 CMIP 代表のエドイン神父です。JPIC には、同じく元 CMIP 担当で、銅鉾山の進出阻止の先頭に立っていたレイ神父がいて、その尽力によるものです。

月額 3000 円のカレッジ支援会員は、このところ 10 名前後にとどまっていて、支援する奨学生も 13 名と決めています。卒業生が出ないと新規受け入れができません。

今回の神父たちの対応は遅すぎた感もありますが、地元の市民の支援開始は、先住民族の希少なカレッジ進学機会拡大のために大変嬉しいニュースです。



くじ引きした会員寄附の小物に喜ぶ夕食後の寮生

< カレッジ卒業生の近況から >

— 回り道したシェリルも国家試験目指します —

7 年前、ミアソンのハイスクールを 3 番で卒業しながら、「両親ともに先住民族」をカレッジ奨学生の条件とした当時の CMIP ディレクターの方針により涙を呑んだシェリル。父親はビサヤ人でした。

親族の支援もあって入学したカレッジも学費が続かずに中退。ゴメロ村に戻って、青年組織リーダーとして活動するとともに、父親の高原野菜作りを手伝っていたようです。3 年前に HANDS 奨学金を受けて復学、この 3 月に晴れて卒業の日を迎えました。



今は 9 月の教師国家試験の受験勉強に専念し、受験後は CMIP のアトモロック小で、ボランティア教師をすることが決まりました。試験に合格できたら、故郷の公立小学校で、村のために働きたいと夢を膨らませています。

— 新年度を迎えた CMIP の小学校・幼稚園の現況より —

吊り橋により、公立小に通学が可能になって閉校したキアミ小、仮校舎で授業を始めて 2 年目のバンリ小など、CMIP 運営の小学校は、山の村のニーズに応じて、増減しながら、この 6 月の新学期は、以下のように、大小 5 校、643 名 (併設の幼稚園含む) が登録を済ませました。ティボリ民族が多いトロクバトを除き、すべてビラーン民族の学校です。

- \*アトモロック (幼・1-6 年生、児童数 150、教師 4)
- \*ラムアフス (幼・1-6 年生、児童数 80、教師 3)
- \*ナブル・カマガヤ (幼・1-5 年生、児童数 249、教師 5)
- \*トロクバト (幼・1-4 年生、児童数 41、教師 1)
- \*バンリ (幼・1-2 年生、児童数 123、教師 2)

私たちは今年も、これら 5 校の週 3 回の給食の他、公立小児童を含む 30 名の奨学生支援で初等教育を支えます。